

郭店楚簡にみる楚系文字の特異性

中村 拓也 (大 郁)

Takuya (Taiku) Nakamura

郭店楚墓竹簡は一九九三年に荊門市郭店村で出土された。有字簡は七三〇枚にのぼり、内容は戦国時代の典籍一八編の写本である。その文字数は一万三千字程度あり、主として道家と儒家の書籍であった。当時中原の儒学が楚国においても行われていたのである。

春秋末からの楚の文化は、それまでの青銅器文化に対して、新たな漆器文化を形成している。情感に富んだ独自の形式が発達し、竹簡の書体の特徴である円転を主とするうねりのある線や、やや縦長の結体をしたいわゆる楚系文字と呼ばれる楚国独自の文字を生み出すに至ったのであろう。その書法的な部分が優れていることから、専門の書写集団によって写されたと考えられている。

楚系文字には甲骨文から千年近く経過し、春秋末の大きな変化の影響もあり、各文字において無義的な線の繁化、点画の連続や省略による簡略化、偏旁などの写し間違えによる異体字等複雑に進行し、独特の形になった文字が散見される。「馬・鹿・鳥・亀」など小篆

とは異なる字例も存在しておりその特異性は様々である。

今作はその小篆とは異なる文字を基盤として「鹿鳴」の二文字を楚系文字の書風にて書き上げた。筆順に厳密な法則があったかは定かでないため出来るだけ忠実に文字を表現することに努めた。漢詩や語句を創作しようと試みた際、その特異性から敬遠されがちな文字ではあるが、間違った文字を使用しないよう正確に書くというところがその文字を更に知ることにつながっていくのである。今後の課題として、文字の過渡期であるこの時代の文字を更に深く追いついていきたい。



鹿
鳴

34×45.5cm